踊れ その果てで?＜ケルベロスの牙＞

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
踊れ　その果てで？＜ケルベロスの牙＞

【Ｎコード】
Ｎ７２５７Ｑ

【作者名】
河野　る宇

【あらすじ】
＊何が正しいかなんて俺には解らない。ただ言える事は――「生きている」それだけだ。※？となっておりますがこの作品からでも読めるようになっております。
※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

◆序章～暗き世界の閃光（前書き）

＊ダークな世界ですが最後までお付き合いくださると嬉しいですです。

◆序章〜暗き世界の閃光

男は暗い道を歩いていた。草色の薄手のロングコートが歩く度に裾を揺らす。

「止まれ！」

「！」

突然、声を張り上げながら男が出てくる。それを合図に、さらに4人ほど姿を現した。その手には各々、銃が握られている。呼び止められた男の前に2人、後ろに3人。

「……」

そうして呼び止められた男は、顔はあまり動かさず視線だけを一瞥していった。その表情は、薄暗い街頭の下では窺い知れない。

「おい」

初めに呼び止めた男が、問いかけるように口を開いた。

「きさま、擁護派か？」

「……」

擁護派？　と少し気になったように頭を動かす。色んなゴミが散らばっているアスファルトの道路。男の左横には分厚いコンクリートで造られた高い塀が威圧的にそびえていた。

「答えろ！」

銃口をガチャリと突きつけた刹那――男の背後からいくつもの銃弾が放たれ、5人はそれぞれに声をあげながら倒れていった。

＊2人の男

「や、日本も危険になったよねぇ」
呑気な声と共に２０代前半と思われる青年が出てくる。さらりと背中まで伸びた黒髪を後ろで１つに束ね、瞳の大きい顔立ち。
暗緑色のカーゴパンツと黒いベスト。その手にはオートマチック拳銃が握られている。
「安全な時などあったか？」
３０代後半、４０代間近のコートの男はしれっと応えた。そして周りの気配に気を配りながら手に持っているリボルバー銃を左脇に仕舞う。
太陽の光にあせたような黒髪に赤みがかった黒い瞳は鋭い。
「あ……」
「！」
か細い声に2人は振り返る。ドラム缶からこちらを見つめる少年がそこにいた。怪訝な表情を向ける青年と男に、少年は恐る恐る近づきコートの男に目を向け発した。
「あ、あの……戒（カイ）さんですよね」
「！」
「こちらが翼（つばさ）さん」
「え！？　僕の事も知ってるの？」
薄汚れたTシャツと黒いソフトデニムのジーンズを履いた幼い顔立ちは2人を怖々（こわごわ）と見上げていた。
「どうして俺たちの事を知っている」
赤黒い瞳が少年を見下ろすと、その少年は続けた。
「説明はあとで。とりあえずこちらに……」と2人を促す。
「……」
戒と翼は互いに顔を見合わせ、警戒しながらその後ろを追う。

しばらく歩くと、少年はキョロキョロと周りを見回し地下鉄の入り口に吸い込まれるように入っていった。
そのまま従うようについていく。階段の途中で何故か頑丈な合金製の扉があった。２人は不思議に思ったが、よく見るとこれは災害時用の遮断扉（しゃだんとびら）のようだ。
どうやらこの地下鉄は利用されなくなって久しいらしい。あちらこちらにカラースプレーで殴り書きがされていて、ゴミだらけになっている。
少年は警戒しながら扉を３回、ゆっくりと叩いた。すると「誰だ」と扉の向こうから男の声が響く。
「昴（すばる）です。連れてきました」
そう応えると細長い窓がシャッ！　と開き、誰かの目が少年と後ろの２人を見定めるように見たあと鈍い音を立てて扉が開いた。
２人は少年に促されるまま、その扉をくぐる。初めに目に映ったのは扉を開けた男。小太りの４０代ほどだろうか、薄汚れたサンドカラーのパンツに水色のＴシャツ。
次に視界を捉えたのは大勢の人間……老若男女（ろうにゃくなんにょ）問わず、壁に寄り添うようにしゃがみ込み、入ってきた見知らぬ２人をいぶかしげに見つめる。
昴と名乗っていた少年に再び促され、たどり着いた先は駅のプラットホーム。薄暗いホームに転々と明かりが輝いていた。
「！」
それはノートパソコンの明かりのようだったが、ノートパソコンをのぞき込んでいる人間たちの中の１人の男の背中に戒は見覚えがあった。
「……真仁（まひと）か？」
「！」
声に気がついた青年は静かに振り返り、懐かしい姿に笑みを浮かべた。
「やあ戒。それに翼クンも」

両手を広げ、歓迎するように近づく。
「えっ真仁！？」
翼は驚いて思わず声を上げた。

＊赤に染まった日

「これはどういう事だ？」
戒（カイ）は改めて見回し、真仁（まひと）に向き直る。２０代後半の青年は小さく笑って腕を組んだ。
「あれから1年、突然の呼び出しに驚いて来てみれば」
「君たちが日本を離れてすぐだったかな」
真仁は地下鉄の次の駅に続く線路の先……暗闇を見つめながら語り始めた。
『クローン狩り』を行うための『牧場』を運営していた企業のトップ数人が国際手配された。
それは、金持ちの道楽のためだけに造られた『クローン牧場』。
生活のために細胞を売った人間たちのクローンを造り、一部の金持ちが楽しむために殺しを行う場所を『牧場』と名付け、「どんな望みも叶える」というエサをぶら下げてハンタードッグという仕事を作り上げた。
牧場の場所は首都の近く。飛行場を造る予定だった土地は計画が頓挫（とんざ）したと同時に遺伝子を扱っていたアメリカの企業に買い取られ、非合法で運営されていた。
非合法ながらも運営が可能だったのには理由がある。政府の中にその企業から金を受け取った者がいた事は明らかだろう。
「いい加減、放ってもおけなかったんだろうね」
その企業は世界各地で雑多な犯罪を続けていたが、アメリカの企業であったためアメリカは諸外国との外交問題に発展する事を避ける目的で国際手配という手段をとった。
「そのあと、『やはりクローンは問題だ』と言いだした政府の人間がいた」
「当然の反応だろうな」
戒はぼそりと応える。真仁はそれに苦笑いを浮かべ一度、目を閉

じた。
「それだけなら良かったんだけどね」
開いた瞼から現れた瞳は愁いを帯びている。
『クローンは禁止にすべきだ』
という風潮が高まったのをきっかけに、日本は狂い始めた……
「その政治家は国民の声を後ろ盾にしてクローン排除を訴えた」
現在、日本に存在しているクローンを全て殺処分し作成途中のクローンも例外を問わず処分する。という暴挙とも言うべき発言を国会で繰り返した。
「！　全て殺処分？」
翼が息を呑む。日本にいるクローンはざっと数えただけでも数百万から数千万体いると言われている。
「……」
戒の眉間にも深いしわが刻まれ、真仁の次の言葉を待った。
「もちろん、反対した政治家も多い。だけど、国民がその前に動いてしまったんだ」
突然に始まる殺戮の世界――「クローンは死ね！」と叫びながら、マシンガンの引鉄を引いた男を皮切りに血塗られた国へと変わっていった……
「それまで『牧場』はボクが管理していたんだけどね。手当たり次第に殺していく奴らが入ってきて、今はここに居を構えているってワケ」
真仁は放置されていたクローンたちに少しずつ教育を施し、生きていける術を教えようとしていた。しかし、クローンの存在が日本を二分した。
「真仁は……クローンたちを殺さなかったんだね」
翼は青年を見つめてつぶやく。
「殺す意味が無いだろう？　牧場は潰れちゃったんだし。それに今いるクローンたちを何故、禁止したいからと殺す必要があるの」
禁止はこれから作成するクローンだけにすればいい……真仁は少

し声を低くして発した。
「例外だってあっていいハズだ」
子どもの産めない夫婦に希望を与えるものでもあるハズなのだから。
「……」
真仁の言葉に戒はしばらく沈黙していたが、ふいに口を開く。
「お前は初めからこうなる事が解っていたのか？」
「えっ！？」
翼は驚いて真仁を見やる。青年は応えずに口の端を吊り上げた。
「ずっと不思議に思っていた」
何故こんな企業に加担していたのか。どうして他の組織と違い、ハンタードッグたちに苦しむような殺し方を望まないのか。
「派手にしろ」とは言われていたが「苦痛をもっと与えろ」とは一度も言われた記憶が無かった。
「さて、なんのことかな？」
真仁は薄笑いを浮かべてそう発しただけだった。

◆第1章〜矢は放たれた

「！　戒（カイ）！？　戒か」

聞き覚えのある男の声。振り返ると大柄な４０代半ばの男が笑顔で立っていた。

「！　怜（レイ）」

「翼（つばさ）もいるのか！」

「久しぶりだね」

怜という男の周りに戒と翼が見覚えのある面々がずらりと並んでいる。

「真仁（まひと）に従ったのか」

戒が感心するように発すると怜たちは小さく頷いた。

「確かに俺たちは今までクローンを殺してきたが他のやつらがそれをやっちゃいけねぇよ」

自分たちのしている事が良い事だとも、ましてや正義だとも思っていなかった。

ただの人殺し――血に染まった手を見つめる己の姿など、誰が良しとするだろうか。

「俺たちは自分のしてきた事を解っているからいい。だが、一時（いっとき）の感情でクローンを殺す事は間違ってる」

怜は喉の奥で舌打ちした。

「政府は今の状態を収拾（しゅうしゅう）しきれず放置状態なんだ」

真仁が説明を続け、他のハンターたちは苦い顔になる。

「で、ボクたちは擁護派（ようごは）と呼ばれていてね。クローンを殺している人たちは強硬派（きょうこうは）と呼ばれているんだ」

「……まさに二分（にぶん）された訳か」

戒はつぶやいた。

「じゃあ向こうにもリーダーがいるんだ」

翼がそう言うと真仁は眉をひそめる。

「強硬派のリーダーは戸塚という男だよ」
「！　戸塚？」
戒はその名にピクリと反応した。
「君は知ってるんだったね」と真仁。
モニタールームで戸塚の画像を見せながら愚痴をこぼした事を思い出す。
「向こうにも向こうのハンターがいてね。良ければ手伝ってくれないかな」
真仁はそう言って戒を見つめた。
「もちろん、断ったからといって君たちを責めるつもりはないよ。こんなコトを頼むボクがおかしいんだから」
「……」
戒は翼を見下ろす。それに気づいた翼は小さく溜息を吐き出して怒ったような口調で告げた。
「僕に気を遣うのは止めてよね。“兄さん”」
「！　兄さん？」
真仁は目を丸くして戒と翼を交互に見やった。
「なんだ、恋人じゃないの」
「誰がだよ……」
真仁のおかしな発想に翼は頭を抱える。
「戒を追いかけていったから、てっきりそうだと思ってた」
「お前の頭の中はどうなっているんだ……」
さすがに戒からも溜息が漏れる。翼は戒を兄のように慕い、戒がハンターを辞めると聞き彼もそのあとを追いかけた。
「戒が僕の事を考えないなら、真仁に協力しているんだろ？　それは僕も同じ考えだ」
死ぬ事は怖くない。僕は戒の行く方向に進む。翼は凛（りん）とした瞳でそう語った。
「……」
大きな瞳で見上げる翼に驚き、そして小さく笑う。

「詳しく教えてくれ」
戒の言葉に、そこにいたハンターたちはワッ！　と歓声を上げた。
「ありがとう。改めてよろしく」
真仁は緩やかな笑みを浮かべ戒に手を差し出す。戒もそれに応えて握手を交わした。

＊レプリカ

戒たちの参戦に何かの準備をしている真仁を視界に捉えながら、戒は再びぐるりと見回す。

「……彼らは」

「うん、クローンたちだよ。主に風俗店で働いていたクローンだけど」

作業をしながら説明する真仁。

「中には『預かってくれ』と言われて預かってるクローンもいるけどね」

「！」

真仁の言葉に翼は一瞬、喉を詰まらせた。そして、躊躇（ちゅうちょ）しながら戒に顔を向けささやくように問いかける。

「戒は……どうしてクローンを造らなかったの？」

「！？」

翼のか細い問いかけに驚いた戒だが、面倒な……という風に口を開いた。

「……クローンはコピーじゃない」

クローンを造ったとしても、死んだ菜都美（なつみ）は戻ってこない。

「昔、クローンを虐待している家族を見た事がある」

「！」

息子が病気で死に、その細胞からクローンを造った。

しかし――「お前は息子じゃない！」父親はそう叫んでクローンを暴行していた。

「クローンを作成する時に説明を怠ったせいだよ」

真仁は横からぼそりとつぶやく。そして戒たちに目を向けずに続けた。

「昔は人間の胎内を介さなければ育たなかったクローンも、今はある程度まで成長させるコトは可能だけど、クローンは生まれ方の異

なる人間であってレプリカじゃない」
　それを一切、説明せず求められるがままにクローンを作成していく。
「全ての人に『クローンはコピーじゃない』という意識が浸透しているワケじゃない。未だにクローンに対する誤認が横行しているんだ」
　だから、その意識さえ徹底させればクローン自体が悪いとは思ってない。
「ちゃんとした意識さえあれば、クローンを認めるコトだって構わないと思うよ」
「……それを見たから、戒はクローンを造らなかったの？　でも、その恋人の両親は」
「俺が止めた」
　娘の事を想うなら、その記憶を大切にしたいならクローンという見せかけの虚像を追ってはならない。
「時間はかかったが解ってくれたよ」
　すでに恋人の両親も他界したが、自分が言った事は間違っていないと今でも言える。
「まあ、今は戦時下にあるワケだから手元にクローンを置いておくのは危険だもの。それで預かってくれって言う人たちが多いんだよ」
　死んだ時は仕方がなかったと諦めてくれ。と真仁は前もって納得してもらい、クローンを預かっている。
「大丈夫。ボクの預かっているクローンの主人たちはボクのお客さんたちだから。まず初めにちゃんとした認識を持ってもらってからクローンを造るかどうか決めた人たちだよ」
「！」
　翼はそんな真仁を怪訝に見つめる。聞けば聞くほど、どうして今まで彼がハンタードッグを雇い『狩り』をさせていたのか疑問でならなかった。

＊新たな目

「よし、出来た」
真仁（まひと）は笑いながら溜息を吐き出し、その機械を戒（カイ）と翼（つばさ）に手渡した。
「！　これは……」
「新しいヘッドセット。特別仕様」
小さなディスプレイの付いたヘッドセットを見つめて発した戒に真仁は応える。
「敵味方識別コードと登録されている全てのクローンコードに赤外線とサーモグラフィ内蔵。もちろん通信機能もばっちり」
「どうやって敵の判別を？」と翼。
「戸塚の処にいるハンターたちは専用の通信機を支給されているんだ。それの電波を識別して表示する」
「ほう……」
懐かしい機械に目を細め、感触を確認する戒。
「中には殺したハンターからその通信機を奪っちゃう人もいるけど。間違って殺してしまっても君たちの責任じゃないからね」
「！」
しれっと発した真仁に翼は視線を上げた。
「悪いけど今は戦いだ。1つや2つの命に構ってはいられない。全てはボクの判断だ、非を負う必要は無いから」
そんな真仁の言葉に、戒と翼は薄笑いを浮かべ溜息を漏らす。
「お前に責任をなすりつけるつもりはない」
「もとより、そんな事は解ってる事だよ」
何を今更……と2人は笑って肩を落とした。
「そうだったね。君たちは優秀なハンタードッグだったのを忘れていた」
ヘッドセットのチェックしといてね。真仁はそう言って少し離れる。リーダーは何かと忙しい。

「ねえ、戒」
「ん？」
翼はヘッドセットをチェックしながら、同じく確認している戒に質問してみた。
「真仁って……どういう人？」
「！　さあな。俺も詳しくは知らん」
「聞いてる限りでは、なんかかなりの人物っぽいんだけど」
ヘッドセットを左耳に装着して続ける。
「噂じゃあ政府の高官にコネがあるとか」
戒は右耳に装着し応えた。
「ふうん……わっ！？」
スイッチを入れた翼が驚く。ディスプレイにいくつもの数字が重なって表示されたからだ。ここにいるクローンたちのコードらしい。
「なるほど。こいつが味方識別コードか」
戒は冷静にスイッチとディスプレイを確認していく。クローンコードは灰色、味方は緑、敵は赤で示されるようだ。
ノートパソコンの横にある、見慣れない携帯ほどの大きさをした通信機らしい機械に赤い文字が示されている。
味方のコードはヘッドセットから出されている電波だろう。戒は勝手にそう推測し、他のフィルタを確認する。
「ねえ」
「なに？」
翼は少し声を張り上げて真仁を呼んだ。
「電波って敵に探知されたりしてないの？」
「ああ、それなら問題ないよ。色んな電波をあちこちで流してるから、傍受しようとすれば攪乱（かくらん）されるだけさ」
真仁の返しに翼は口笛を鳴らす。
「通信は毎回、違う暗号で発信される。問題はないだろう」
ヘッドセットをいじりながら戒が発した。
「！　なんで知ってるの？」

「それが基本だ」
目を丸くしている翼に鼻を鳴らす。元自衛隊の特殊部隊に所属していた戒は、こういう機器に関してはエキスパートと言っていい。

◆第2章～黒い獣

「戒！」
「！」
呼ばれて振り返ると、懐かしい顔がそこにあった。
「烈！？」
５０代半ばの白髪交じりの男が戒に小さく手を振る。
「田舎に帰ったはずでは……」
戒が苦笑いを浮かべる烈という老齢の男性にそうつぶやくと、男は目を伏せて口を開いた。
「真仁君がハンターたちに声を掛けている事を知ってね。国内の内乱はテレビの報道で知っていたから、わしも来たんだよ」
「ボクは断ったんだけどね。どうしてもとうるさくて」
腕を組んで真仁が説明しながら近づく。
「前線には出られんが、後方支援なら出来る。ハンターの事をよく知る者がいた方がいいだろう」
そう言って、ハンタードッグを引退し田舎で隠居生活をしていた烈は品の良い紺色スーツの襟に触れる。
彼のスタイルは紳士的な服装と戦法だったな。戒はそれを思い出し目を細めた。
「殺す側から守る側に代わるのだ。このチャンスを見逃すわしではない」
戒は烈の言葉に薄く笑う。

それから、ノートパソコンをいじっている真仁を見下ろしながら戒はリボルバーの手入れを始めた。
着ていたコートを脱ぎレンコンの形をした真ん中にあるかたまりを横にスライド（スイングアウト）させ、銃弾をその穴に差し込んでいく。

「……」
その姿を見ていた真仁は、呆れるように溜息を吐き出し笑みを見せながら左肘を突いて頭をその手に乗せた。
「相変わらず君は『歩く武器庫』だね」
そんな真仁の声に戒は鼻を鳴らす。青年が呆れるのも無理はない。
両足の太ももにはレッグホルスター（収納ベルト）にリボルバーが2挺、脇にはショルダーホルスターにリボルバーが1挺。腰の背後には2つのバックサイドホルスターにオートマチック拳銃が2挺とナイフの柄がちらりと覗いている。
もちろん、それぞれのホルスターには予備の弾倉とカートリッジが収められていた。彼はリボルバーとオートマチックの2種類のハンドガンを操る。
リボルバーは信頼性の高い銃だが、旧式として最近ではあまり使用されていない。薬室と弾倉を兼ねている形状のため、カートリッジの装弾数が少ないのが理由だ。
使用されたカートリッジの薬莢も手動排莢なので連続した戦闘には不向きともいえる。
ついでに言えば消音器は意味をなさない。速射性は高いが使い処の難しい銃でもあるという訳だ。
「どうせまだいくつか何か隠し持ってるんだろ？」
「隠しているから見えないんだろ」
真仁は、しれっと言った戒に肩をすくめた。
「君が参加してくれて頼もしいよ」
「過大評価は避けるべきだ」
俺に頼られても困る。というように戒は眉をひそめた。
「辞めたあともトレーニングはやってたんでしょ」
「！」
軽く手で胸を示される。ハンタードッグを辞めモンゴルで1年を翼と共に過ごしていたが、確かにトレーニングは欠かさなかった。薄い黒のボディスーツがなぞる体のラインでそれがよく解る。

「やらんと返って気持ちが悪い」
「まあ習慣ていうのはそんなもんだよね。タバコは止めたようだけど」
「！」
言われて思わずパンツのバックポケットに手を持っていく。
恋人の影響で、その彼女が死んでからも吸い続けていた無害タバコは翼という新たな家族が出来た事で吸わなくなっていた。

＊区別は必要か否か

「しっかりトレーニングやってた事はカメラで見て解ったよ」
「！」
真仁がそう言って、いくつかのノートパソコンの画面が外の風景だという事に気がつく。
「『牧場』で使ってたカメラはボクが有効に使わせてもらってる」
日本から逃げた企業の資材は真仁が一切合切（いっさいがっさい）回収して使っていた。彼らしいといえばらしい処に、戒は笑みを浮かべる。
そのあと、戒は苦い顔をして１人の少年に目を移した。
「１つ訊く」
「何？」
「どうしてあの少年を迎えに使った」
少し怒った口調。年端もいかない子どもを使った事に戒は少々、声を低くした。
「彼が君たちを迎えに行きたいってきかなかったんだ」
「昴（すばる）……といったか」
１５歳か１６歳ほどの少年は他のノートパソコンを操作している。
「他の人を使うより、ボクにとっては楽な部分もあるよ」
「！」
真仁の言葉に眉をひそめた。そしてすぐ「！　まさか……」と驚いたように少年を見やる。
「彼はクローンだよ。ボクの所有物」
まだ『牧場』が運営されていて、戸塚とは組織間の付き合いをしていた時に彼が送りつけてきたクローンだ。
「ボクはホモでも少年趣味でもないのにねぇ」
小さく溜息を１つ。
放っておけば政府に殺処分されてしまう。真仁は仕方なく『所有物申請』をして自分の家に置いた。

「識別コードを見なければボクたちと何ら変わらないよ」
クローンには必ず識別するチップが埋め込まれている。そして生殖能力も奪っているため、風俗店では重宝されていた。
「……」
確かにそのようだ。少年は何の違和感もなくノートパソコンを操作している。本来なら、クローンがそこまでの知識を持っている事は驚きである。
大抵は主人である人間が自分の満足する程度までしか教えない。
「見分けがつかないのが当り前なんだけどね」
真仁は呆れたように溜息を吐く。その表情に戒も同意するように目を細めた。
「彼らはボクたちと同じ人間なんだから。どうして区別する必要があるんだか」
どこを見るでもなく、青年は苦笑いを浮かべ発する。
「今はまだ区別する必要があるからボクもそうしてるけど」
本当はしたくない……そんな言葉が続くのだろう。途切れた言葉に戒は小さく笑った。
「部分的クローンが出来ればいいんだけどね」
真仁のひと言は、その難しさを表している。確立はされている、しかし安定させる事が出来ないでいた。腕の設計図を出したハズなのに、それはいつの間にか別のものに造り替えられている……
「人、1人を作り出す方が簡単なんだよねぇ」
「それはそうだろう。設計図は全体として作られているものだ。分解すれば『分解して個々になる設計図』を新たに加えなければ」
「！　上手いコト言うね」
部分的作成が成功しているのは、他の生物にその設計図を加えているためだ。何もない処からそれのみを造り出す事はこのうえもなく困難で研究は進んでいない。
「途中まではそうなんだよ。でも移植可能な段階になる前に安定性が失われる」

生物からの部分的クローンは成功しているが、それではコストと需要が追いつかない。何故なら、生物に接着させるという事は成長速度を上げる事が出来ないのだ。
「成長促進の方が先に可能になるなんてねぇ。皮肉なもんだ」
「仕方がない。促進は出来ても若返らせる事は出来ないんだからな」
「ある程度までは若返りは可能だよ。ただし何度も繰り返す事は出来ない」
「……あのね2人とも」
翼が目を据わらせて割って入った。
「難しい話、しないでくれるかな」
脳が溶けそうだよ……翼は頭を抱えて深い溜息を吐き出した。

＊血の瞳

「あれくらいで難しいの？」
真仁（まひと）は皮肉混じりに歩きながら発する。
「頭が悪くて悪かったね」
フン、と翼（つばさ）は鼻を鳴らした。
「今日は様子見だけにしなよ」
後ろにいた戒（カイ）に発すると、彼は慣れた手つきで渡されたヘッドセットを右耳に装着する。
「1時間で戻る」
「ホントに君も行くの？」
同じようにヘッドセットを左耳に装着する翼に真仁は念を押すように問いかけた。
「なんで僕にはそういう聞き方するかな……」
納得のいかないような声。確かに翼も優秀なハンターだったが、戒に比べるとまだ幼さが残る戦い方なのだ。そもそも、戒と比べること自体が間違っていると言えなくもない。
「君たちがいた東京だと思わないコト。その記憶は一掃して」
「解った」
戒がそう言ったあと、翼は親指を立ててウインクした。
地下へ続く階段の始まりまで警戒しながら上っていく。そして先に地下に戻っていった真仁の合図を待った。
＜ＯＫ。誰もいないようだ＞
ヘッドセットから真仁の声。戒はリボルバーを翼はオートマチック拳銃Ｐ２２６を右手に持ち、気配を探りながら駆け出した。
「俺から離れるな」
「うん」
出来るだけ真仁がカメラを見て、人のいない方向に2人を誘導する。今回は空気を読む事と地形を肌で確認する事が目的だ、戦闘は

なるべく避けたい。
「！」
戒が駆け出した後に続く。外はすでに薄暗く、これから訪れる夜を伝える鳥の声が空に響き渡っていた。
「……っ」
戒は苦い表情を浮かべる。確かに1年前より空気は重くなっていた。肌に伝わるピリピリとした痺(しび)れは緊張感からかこの場の気配なのか……
この先には武器屋があったと思うが。と戒は考えながら周りに気配を配り足を進めていく。表向きは雑貨店だがその裏ではハンタードッグたちに武器を売っていた。
「！」
戒は、自分の目に映った光景に少しばかり息を呑んだ。
「……予想していた事とはいえ」
やはり痛々しいな……とつぶやく。店のシャッターは破られ、中の商品はことごとく奪われて散らばっている。
少しずつ店内に入った。武器が置いてあったのは店の奥――カウンター向こうの扉を開けた部屋だ。
きしむ扉をゆっくり開き見えた景色に目を細める。当然のように武器は全て奪われ、床には血の跡がどす黒く染みを作っていた。
この店はクローンを店員として使っていたのだ、狙われないハズはない。人はどこまでも残酷(ざんこく)になれる。戒はそれをよく知っている……
自衛隊の特殊部隊にいた頃、仲間の数人が精神病棟に入った。まともにいられた自分に自嘲気味に笑ったのを覚えている。
極秘任務を主とする戒のいた特殊部隊は海外での活動がメインだった。そこには、おおよそ想像もつかない光景が広がっていた。
クローンの扱いはかなり酷く、何度も目を背けたくなる衝動を必死に抑え任務を遂行するのは至難の業だった。
どれほど日本が平和なのかをまざまざと見せつけられ思い知らさ

れた。
「……」
思い出し瞳を細める。血が固まったような赤黒い瞳は、獣が声もなく鳴いているように目の前の部屋を映し出していた。

＊陽炎の彼方

それから店を出て辺りを散策する。
「！」
一瞬、ディスプレイの端にクローンのコードが映ったように見えた。
＜戒（カイ）、そっちはカメラが無い＞
「少しだけ進む」
右耳に指をあて真仁（まひと）に応える。
「……？」
背筋が少しぞわりとした。そして嫌な匂いが鼻を突く。戒は翼（つばさ）にもう少し離れてついてくるように手で示し警戒しながら角を曲がった――
「！　……」
持っていたリボルバーを下げ、眼前を呆然と見つめる。
「？　戒？」
「来るな！」
怪訝な表情でのぞき込もうとした翼を制止した。

「これは……」
戒のヘッドセットに取り付けてあるカメラに映し出された光景を真仁は見つめ、険しい表情を浮かべた。その瞳は怒りを表している。
＜初めて見るのか＞
「うん……そっちにはまだカメラを設置してないから索敵（さくてき）は行っていないんだ」
言いながら悔しさに指を噛む。
「とりあえず、一通りカメラに映して戻ってきて」
＜了解した＞

真仁からの通信を終え、戒は改めて目の前の死体の山を見つめる。
「……」
ディスプレイに折り重なるように表示されているクローンコード……乱雑に積まれた死体はとても綺麗と呼べるシロモノではなかった。
アスファルトに接している死体はどれも野犬に食い荒らされ、見るに堪(た)えない。
「なんで見ちゃだめなのかなぁ」
翼は、角で周りを警戒しながら戒を待つ。ディスプレイの表示でどんな光景なのかは解っている。
数分後、戒が戻ってきた。翼はそれを確認し2人は真仁たちのいる地下に足を向ける。

戻ると真仁たちはすでに戒から送られてきた映像を調べている最中だった。
「どうだ」
戒は渡された水を飲みながらパソコンをいじる真仁に近づく。
「ざっと調べただけでも50体弱はあるね」
「……カメラの存在を知ってだと思うか？」
「いや、たまたまここに積んでいただけだと思う」
真仁はディスプレイから目を外し足を組む。そして深い溜息を漏らした。
「世の中に理不尽な事なんかごまんとある」
「！」
青年はぼそりとつぶやいた。濃い灰色の瞳は、その心の奥を覗かせてはくれない。
「擁護派(ようごは)と強硬派(きょうこうは)のグループはいくつかに別れていてね。地方の仲間たちとの連携も蜜に取っているんだけど、やはりこの都心が密集地帯なだけに色んな意味で激戦区だよ」
何かを忘れようとするかのように別の話題を戒にふった。

「首都付近に人を集めすぎた結果だ」
戒は水の入ったペットボトルをデスクに置き腕を組む。
「まあ確かにそうだね。人が密集する地域に雇用が生まれると思うのは浅はかだ」
需要と供給のバランスが崩れ、全体的な雇用率が下がってしまう。
「……」
それから2人は押し黙る。目の前の現実からほんの少しだけ逃げたくて別の会話をした自分たちをあざ笑うように、2人は目を合わせてニヤリと笑みを浮かべた。

◆第3章〜堂に入っては堂に従え

「ここが戸塚の拠点だと思うんだ」
真仁(まひと)は目の前にあるパソコンのディスプレイに映されている地形に指を差し口を開く。
「……大使館か？」
「旧ロシア大使館。彼らしい選択だよ」
皮肉混じりに発した。戒(カイ)はその画像を見ながら思案する。
「確証は掴めてないんだな？」
「うん、まだ予想の域を出ていない。でもほぼ間違いないと思う」
言いながらキーを打つ。すると赤いマークがいくつか示された。
「丸いマークが監視カメラ。四角いマークがその時に確認出来た武装している人間」
都心から西の住宅街の端に位置している建物。敷地面積は確かに広いようだ。
「周囲はすでに戦闘で家屋が破壊されて雑草が生えたりしてる。視界が邪魔されない場所になってるんだ」
「ふむ……戸塚について知ってる事は？」
真仁はそれに苦い顔をして発する。
「そうだね……彼はとても臆病だと思う。でも権力とかには強欲かな。ついでに言えばショタコンだね」
「ほう」
戒は感心したようにつぶやき、ちらりと仲間と談笑している翼(つばさ)を見やった。
「ちょっと年は食ってるか？」
「彼の好みだと思うよ」
しばらくの沈黙……
「まあとりあえず揺さぶりにかかるか」
「派手によろしくね」

＊兎の衣を借る虎

「戸塚が飼っているハンターたちは定期的に巡回してクローンを探してる」

次の朝――真仁(まひと)はプロジェクターで壁に都心の地図を映し出し、教鞭(きょうべん)を手に差し示していく。

「とは言っても、彼らはボクたちのようなヘッドセットを使ってるワケじゃない。自分たちの判断で手当たり次第に出会った人たちを殺しているんだ」

ハンターたちは聞き慣れた言葉に渋い表情を浮かべた。新しく参戦する戒と翼以外のハンターたちは、ずっとそんな相手と戦ってきたのだ。

「戦力としては五分五分だと思う」

互いに決定打(けっていだ)に欠けている。現在は膠着状態(こうちゃくじょうたい)と言ってもおかしくはなかった。

「これからの作戦としては、戒(カイ)と翼(つばさ)を中心に派手に揺さぶりをかける」

それに異議を唱える者はいない。一通りの確認を終え、作戦会議は締められた。

「ねえ戒……」

「なんだ」

装備確認を行っている戒に翼がぼそりと話しかける。

「なんか僕の服だけみんなと違う気がするんだけど」

「気のせいだろ」

戒はしれっと応えた。納得のいかないような顔をする翼を一瞥(いちべつ)し、再び武器の確認をしていく。

「気のせいなのかなぁ……」

首をかしげて離れていった。確かに翼だけは替えの服を渡され、

それは他のハンターたちと少し違っていた。
戒はいつもの服装だ。革靴に暗緑色(あんりょくしょく)のパンツ、そして草色の薄い生地のロングコート。中には黒のボディスーツを着ている。
他のハンターたちは共にミリタリー服で固めていた。しかし翼だけは……ソフトデニムのジーンズに長袖のTシャツ、その上はファッション性の高いグレーの防弾ベストである。
その姿は彼の可愛い顔立ちを引き立たせるものだった。もちろん、Tシャツの下には戒と同じボディスーツを着用している。

数時間後、戒と翼は武装して外に出た。ヘッドセットから流れてくる音声とディスプレイに示される表示を頼りに荒廃した街を警戒しながら駆ける。
＜そこから西に１００ｍほど行くとハンターがいる＞
真仁の言葉に２人は西に向かった。こちらがカメラを設置しているのと同様に、相手も当然そこかしこにカメラを仕掛けている。
「……」
あれが敵のカメラか。戒は口の中でつぶやき翼を連れてレンズの前を横切った。

「！」
ディスプレイを見ていた１人の男が身を乗り出す。そしてもう１人の男に何かを指示すると、指示された男が部屋から出て行った。
しばらくすると別の男がその部屋に入ってくる。
「戒が現れただと？」
腹の出っ張った４０代後半と思われる男が低い声でディスプレイをのぞき込んだ。やや広めの部屋にいくつものノートパソコンが並べられ、それを常に見つめる男たち。
「やはり真仁に付いたようですね」
カメラの望遠をアップにして戒をクローズアップした。
「！　翼も来ているのか」

戒の傍(そば)にいる青年を見つけた男は少し声を高くした。その様子に少々、眉をひそめた部下と見られる男は気づかないふりをして続ける。
「どうしますか？　厄介な相手ですよ」
その男、筒井が問いかける。
牧場がまだ運営されていた頃、組織同士の諍(いさか)いはなかったが所属しているハンタードッグたちの情報はやりとりされていた。
組織の体制とハンターとの相性もさることながら、気になるハンターと接触し引き抜きなども行われていた。
その中で戒は多くの組織から一目置かれている存在だったのである。当然この組織ー戸塚の組織ーも戒を常にチェックしていた。
「戒は殺せ、翼は傷を付けずに捕まえるのだ」
「わかりました」
そう言って出て行く男の背中に応え、再びディスプレイを見つめながら通信機に手をかけた。
翼は戸塚の個人的な好みでチェックされていたに過ぎない。戒と共にハンタードッグを辞めたと聞き落胆していたが、再び巡り会ったこのチャンスを逃したくは無い。
アメリカの企業が運営していた牧場に参加していた組織は数多くあったが、彼らもまた擁護派と強硬派に二分されていた。

街中を駆けていた戒のヘッドセットに真仁から通信が入る。
＜相手は気がついたと思う＞
「！　そうか。翼、戻るぞ」
「え？　もう？」
出てすぐに戻ると言った戒に首をかしげる。
「今回は挨拶だ」
「！　ああ……」
カメラを指さした戒に翼は納得した声を上げた。

＊質と量

次の日――戒（カイ）と翼（つばさ）を加えた本格的な戦闘が開始された。相手との距離は約５０ｍほど。主なリーダーは怜（レイ）だが戒の指示には皆、従うように真仁から言われている。

金属の看板やコンクリートの塊（かたまり）、ドラム缶などを盾にして銃撃戦を繰り広げていた。

銃弾が飛び交い、激しい音が断続的に響き渡る。戒は壁から相手の全体を窺いヘッドセットに発した。

「上からの映像は出せるか！？」

＜ちょっと待って……そこから右斜め上のビルからの映像を送る＞

真仁の声に右上を見上げる。敵側の背後にある高いビル、そこに設置されているカメラの映像が戒のヘッドセットのディスプレイに映し出された。

＜そのカメラと君のヘッドセットをリンクさせた＞

「……」

戒はヘッドセットにあるボタンでカメラを操作する。こちらは６人、相手は１０人だ。数では負けているが……ちらりと翼に視線を移し、怜に声を送った。

「怜、翼を奴らに少し見えるようにして左から攻めろ」

＜えっ？　なんだって？＞

通信を切り、ヘッドセットを左耳に付け替えスナイパーライフルに手をかけた。怜は翼に右側で攻撃するように指示を出し、見つからないように４人が左に回る。

にわかに相手の動きが変わった。戒以外、誰も気づかない変化だがそれを逃すほど彼は優しくはない。

スナイパーライフルの引鉄（ひきがね）を引くと、向こうの敵が１人派手なリアクションで姿を消した。

「！」

それに気がついて戒は装填(そうてん)されているカートリッジを確認する。
「……」
当たると少々、強い衝撃のあるカートリッジが装填されているようだがまあいいか……と戒は再びスコープをのぞき込んだ。
相手はそれに警戒して身を縮めたが、攻撃する時はわずかでも体を出さなければならない。戒はその一瞬に集中した。
ライフルから放たれる弾丸は確実に敵を捉えていった。さすがに4人も倒されると相手は少し慌て始める。
戒はスコープ越しに見える景色に懐かしさを感じ目を細めた。

「……化け物か」
筒井がディスプレイを見つめてぼそりとつぶやく。戒という男、1人が加わっただけで形勢はかなりこちらに不利となった事を感じた。
他の場所でも戦闘は行われているが戒のいる戦場が最も銃撃が激しい。
「……」
ちらりと後ろにいる人物を一瞥した。その男は別のノートパソコンのディスプレイを眺めてニヤニヤしている。
腹の出た40代後半の男、戸塚は映し出されている翼に口の端を吊り上げた。真仁も戸塚も互いに設置したカメラを使い戦闘を有利に進めようとしているが、ハンターの練度(れんど)の差は歴然だった。
ハンターの数は圧倒的に戸塚側が勝(まさ)っている。それでも真仁が互角に戦い抜けるのはハンターたちのレベルの差だ。
それに加えて真仁の指揮にも目を見張るものがあった。相手に予測する暇を与えず翻弄(ほんろう)する。
組織同士の付き合いの頃はただの若造だと舐めていた戸塚だが、今では目の上のこぶでしかない。

◆第４章〜閃光の先

「！？」
戒（カイ）の横を銃弾がかすめた。それに少し驚き飛んできた方向にスコープを向ける。
「真仁（まひと）……敵の後方、約５０ｍの地点」
＜待って、リンクした＞
別のカメラからの映像が戒のディスプレイに映る。ヘッドセットを操作しながらスコープを覗いていると――「！」

「！　まさか……」
その映像を見た真仁も一瞬、息を呑んだ。
＜奴の通信機につなげられるか？＞
戒の声に真仁はキーボードを操作する。
「少し待って。彼は戸塚の組織じゃないから……」

「……」
スコープを覗く戒の表情は苦い。
＜つながった＞
戒のヘッドセットにしばらく呼び鈴が鳴り響く。そして……
「水貴（みずき）」
＜しばらくだな、戒＞
スコープの向こうに捉えた男が携帯のようなものを右耳にあてがい無表情に立っている。逆の手にはライフル。
「何故お前がそこにいる」
＜それが正しいと思ったからさ＞
その言葉に戒は喉の奥で舌打ちした。ハンタードッグをしていた頃、戒と互角の力を持つと謂（い）われていた男……水貴。
赤茶けた髪に彫りの深い顔立ち、戒よりやや年下だと思われる風

貌だがその瞳は戒と同様に鋭い。
奴とやり合えば死ねるかもしれない……そんな戒の思考に反して、水貴とターゲットがかち合う事は一度もなかった。
戒がハンターを辞めるより少し前にハンターを辞め、外人部隊に入隊したと聞いていた。その水貴が目の前にいる。しかも敵として。
「お前のいた組織が戸塚に付いたからか」
＜それもある。だがそれだけじゃない＞
「何故だ」
＜おまえには解らんよ＞
「！？」
一瞬、スコープに捉えた水貴の口の端が吊り上がり戒はゾクリとした。
「！　水貴！」
背中を向け遠ざかる男に叫んだが通信は切られた。

＊確かな痛み

数秒、呆然とした戒（カイ）だがのんびりしている場合じゃない。すぐに意識を切り替えて戦闘に加わった。

スナイパーライフルを構え敵をスコープに捉える。捉えた男が顔を出すタイミングを見計らって引鉄（ひきがね）を引いた。

銃弾が当たって倒れた事を確認しスナイパーライフルを下げる。装填していたカートリッジは使い切った。何より、これ以上は集中出来ない。

装填数は5発、その数だけ敵も倒した。まずまずだ。思いながらリボルバーを右太ももものレッグホルスターから引き抜く。

カートリッジの確認をし翼（つばさ）の隣に駆け寄りしゃがみ込んだ。

ニコリと翼が笑った刹那――

「！？　う……っ」

「！　翼！」

青年の右肩に銃弾が当たる。その勢いで倒れ込む翼を戒が受け止めた。

「！？」

その映像見ていた戸塚がガタンと立ち上がり、握りしめた拳を震わせる。

「……」

その形相に、そこにいた男たちは黙り込んだ。

「翼っ」

「いたた……だ、大丈夫。かすっただけ」

戒たちが着ているボディスーツは正面からの衝撃には強いが横の擦れには弱い。銃弾が走るほどの速度だと、やはり負傷は免れない。

戒はバンダナを取り出し翼の肩を強く縛った。

「……っ」
思わず小さく唸った翼に、戒は安心させるように目を合わせる。
＜今回はここまでにしよう＞
真仁の指示に戒たちは素早く退いた。

「……」
ディスプレイ越しに戸塚はそれを確認し、筒井に声を低くして発する。
「撃った奴を連れてこい」
「解りました……」
それだけ言うと戸塚は部屋から出て行った。

「翼クン大丈夫？」
肩を押さえて帰ってきた翼に真仁が声をかける。
「大丈夫だって。そんなに深くないから」
戒に促され翼はホームの端でパイプイスに腰掛けた。
「……」
服を脱がせ怪我の具合を確かめる戒。
「縫うぞ」
「ええっ！？」
戒が手を差し出すと仲間がソーイングキットをその手に乗せた。
「我慢しろ」
「うへぇ～」
げんなりして針を５０度の酒に浸し消毒している様子を見つめる。
裂けた部分にも酒を塗られ声を上げた。
「せめて消毒液にしてよ～」
「ごちゃごちゃ言うと痛くするぞ」
「……」
翼は黙り込んだ。
「い……っ！？」

拳を強く握りしめ必死に痛みに耐える。
「終わりだ」
「はぁ～……」
戒が離れると別の仲間が包帯を巻いていく。
「クスクスクス……」
「！」
ニヤニヤと笑っている真仁に怪訝な表情を浮かべる。そんな戒に青年は口を開いた。
「彼、怒ってると思う？」
「！　ああ……どうだかな」
「まあゆっくり休んでよ。疲れたでしょ」
「そうさせてもらう」
戒はそれだけ言うとコートを脱ぎながら壁に向かい、しゃがみ込んで背を預け腕を組み目を閉じた。
投げ捨てられたコートを掴み上げ、真仁は「お疲れさま」と小さく発して戒にかけてやる。
敵を狙撃する集中力というのは気力と体力をかなり消耗する。静かな寝息を立てている戒を真仁は労(ねぎら)うようにじっと見つめた。

＊神に祈るのは――

「……」

戸塚は、数人の男から滅多打ちにされている1人の男を冷たく見つめる。一通り満足したようで高価な椅子から立ち上がると窓から外を眺めた。

声もなく倒れている男を他の男たちが両腕を抱えて連れていく。筒井はそれを見て戸塚に視線を移した。

こんな情勢で自分の趣味にこだわる戸塚に呆れるが彼に逆らう事は出来ない。誰だって今の男のような目には遭いたくはない。

流れ弾がたまたま翼（つばさ）という青年に当たっただけだろうに、その責任を取らされて袋だたきなんて笑えない冗談だ。

あの青年が死んでいたらどうなっていたのか、折角の戦力が1人減る事になっていたかもしれないと考えると溜息が漏れるばかりだ。

相手には戒（カイ）という強敵がいるというのに……筒井は苦い表情を浮かべた。そんな筒井の心配をよそに戸塚はまったく別の事を考えていた。

「戒……うっとうしい奴だ」

敵として。ではなく、翼の近くにいる事にだ。翼があの男を慕っているのは知っている。あの男のせいで、いくら「ポイントを倍にしてやる」と持ちかけても翼が自分の組織に来なかったのだ。

当然、翼は戸塚の個人的な理由で引き抜きに遭っていた事など知るよしもない。

「真仁（まひと）」

「！」

包帯を巻き終わった翼が肩を押さえながら声をかけた。

「水貴（みずき）がいたんだって？」

「うん」

２人は表情を曇らせる。
「彼が契約していた組織が戸塚側に付いた事は知っていたけど、まさか彼も戻ってきていたとは思わなかった」
足を組み、思案するように唸る真仁を見下ろす。
「真仁から見て……勝てる？」
戒は……という言葉を飲み込み真仁を見つめた。その視線には合わせず、真仁は宙を見つめて言葉を選ぶ。
「……難しいね」
「！」
「彼は戒とは違ったタイプの兵士だけどレベルは互角だ」
戒は細身を活かした戦い方だが水貴は体格が良い。戒からすれば重戦車を相手にするようなものだ。
「分厚い装甲を貫くのは至難の業だよ」
ちょっとやそっとの攻撃じゃ倒れない。水貴は今までそうやって闘ってきた。
「水貴ってクォーターだっけ」と翼。
「確か祖母がアメリカ人だったかな」
「それにしたってデカ過ぎだよなぁ」
戒も１７８？と日本人にしては高い方だが水貴はさらにその上をいく１９２？の長身だ。それに伴う体格の良さは戒を軽々と持ち上げてしまうほどだと思われる。
「！　ああ、そういえば」
真仁は何かを思い出したように発した。
「随分と健康的になったね」
「！」
以前はもっと痩せていた戒を思い浮かべる。あの時の戒は死ぬ事を望んでいたせいでロクに食事もとっていなかったためだが、真仁は今の戒を見て内心ホッとしていた。
「ん……言い聞かせるのも大変だったよ」
「あはは」

軽く笑った真仁に、翼は少し険しい表情を浮かべつぶやく。
「戒は死なせないでほしい」
「！」
真仁は眉をひそめて翼を見上げた。
「僕の事はいいんだ。充分に幸せだったから。でも……」
「戒と同じ事を言うんだね」
翼の言葉を遮(さえぎ)り真仁は応える。
「君たちを死なせたくないのはボクもだ。だけど最後に決めるのは神様なんだよ」
そればっかりはボクではどうにもならない。真仁は目を伏せ薄く笑ってささやくように発した。
「神様に抗(あらが)ってみせるさ。出来る限りね」
いつもの笑顔でウインクした真仁に翼は小さく微笑んだ。

◆第5章～意識回避

次の日――今日の作戦を決めるためハンターたちが集まる。
「今日は5つのパーティに別れて攻撃を行ってもらいたい」
真仁（まひと）の言葉にハンターたちが納得するような表情を浮かべた。
「君たちが戦っている間にボクたちは移動を開始する」
「！」
「移動？」
戒（カイ）はそれを理解し、翼（つばさ）は首をかしげる。
「一ヶ所に留まるのは得策じゃない。ボクたちは定期的に移動を繰り返して相手の目から逃れているんだよ」
翼に説明して真仁は続けた。
「移動場所はヘッドセットで伝える。決行時刻は今から約2時間後の11：30（ヒトヒトサンマル）でよろしく」
それを聞いたハンターたちはすぐさま準備に取りかかる。真仁と烈（レッ）たちも移動準備を始めた。
地下鉄という場所を利用して線路を歩いての移動だと思われるが、数百人のクローンたちを連れての移動はかなりの時間と労力を要する事だろう。
「色々と大変なんだなぁ」
翼が呑気に発すると、真仁は少し苦笑い気味に応えた。
「彼らが自分で自分の身を守れるならいいんだけどね」
そういうワケにもいかないから……と真仁は言いながら引き抜いたコードを束ねて箱に投げ入れていく。
「何人くらいいるの？」と翼。
「ん～こないだざっと数えた時は200人くらい」
「！　多いね」
「今でもいつの間にか増えてるよ。増えたクローンは身体検査してから置くようにしてるけど」

「え、なんで？」
「敵が送り込む可能性を考えろ」
戒が翼の頭に手を置きながら発した。
「！　あ、そうか……」
「疑いたくはないけどね」
「今の状況では当然の措置だ」
「今いるクローンのコードを記憶させて新たなコードが発見されたら知らせるようにしてある」
と、手に持っている見慣れない機械を示す。携帯ほどのサイズのものをコートの胸ポケットに仕舞い、真仁は準備を続けた。
「あ、でもそれで不思議に思ってたんだけど」
翼が思い出して戒に訊いてみた。
「ここのクローンたちのコードって、敵は探知してないの？」
識別チップが埋め込まれている以上、それを認識する端末があれば表示されてしまう。
「それも心配無いよ。地下は閉鎖されてるからね、携帯の電波が届かないのと一緒。上からいくら調べたって無駄なの」
真仁が少し離れた距離から天井を指さして説明した。
「やつが地下を根城（ねじろ）にした理由はそういう事なんだろう」
「う……どうせ僕は頭が悪いよ」
「……」
戒はその言葉に真仁を見つめた。彼がそうならなくてはいけなかった理由があるのだとするならば……それは心地よい過去ではなかったのかもしれない。
憶測で物を言うのは好きじゃない。戒は一度、目を閉じて戦う準備を始めた。

＊レールウェイ

＜移動には数時間を要する。それまで気取(けど)られないようにヨロシク＞

ハンターたちは走りながら真仁(まひと)の声を聞く。こちらの動きに相手も合わせてくるハズだ。所定の位置に到着すればすぐさま銃撃戦となるだろう。

翼(つばさ)は肩を負傷しているため、今回は真仁たちと移動する側に回った。

「！」

予想通り、戒(カイ)がたどり着く前に銃声が聞こえてきた。すぐさましゃがみ込み両手の指ぬきグローブを確認するようにはめ直すと肩に提(さ)げていたスナイパーライフルを手に取る。

今回のライフルはボルトアクション式と呼ばれる単発式のスナイパーライフルだ。命中精度でいえばこちらの方が高い。

近距離や単独での戦闘にはやはり不向きな武器だが、今では旧式と言われている武器類は単純な構造のものが多いため故障が少ない。

戒は、ライフル上部についているボルトハンドルと呼ばれるレバーを引いた。カートリッジを装填(そうてん)し、再びハンドルを戻す。

「スコープだけは最新だがな……」

と口の中でつぶやきターゲットを捉える。片膝を立てライフルを固定――戒は両利きに矯正しているため落ち着いた場所でなら左でも狙撃が可能だ。

「……」

数秒、息を止め引鉄(ひきがね)を引く。

「ここは何人だ？」

スコープを覗きながら戒が訊ねる。

＜およそ１０人＞

返ってきた声に舌打ちして再び引鉄を引いた。こちらの分散に合わせ向こうは数を多めに差し向けている。必ず敵はこちらの数より

多めにハンターをよこしている。そうでなければ勝てない事を充分に理解しているのだろう。
「そういう処は頭が働くとみえる」
戒は薄笑いでつぶやいた。こちらの数は前線に7人、後方支援に3人で戦っているが正直ギリギリの数だ。
仲間にライフルやマシンガン、ハンドガンで弾幕を張ってもらい戒が狙撃をする形をとっているが……向こうにはいくらでもストックがあるらしい。
倒してもいつの間にか数が元に戻っている。こちらは1人も減らせないというのに……なんだか理不尽な感覚に戒は少し怒りを憶えた。
そんな戒の横を何かがかすめて後ろで大きな爆発音が響く。
「……」
おいおい……戒はゆっくりと顔を向けて数秒、呆然とした。
「ロケットランチャーか……」
こいつは気をつけないとな。と発してライフルのスコープをのぞき込む。
「そんなものをぶっ放すな」
言いつつ引鉄を引くと、ランチャーを持っている男が大きなリアクションのあと消えた。数時間の攻防戦ののち真仁の声がヘッドセットから流れる。
＜OK、移動を完了したよ。場所は――＞
戒たちは警戒しながら一端、撤退(てったい)した。

真仁たちと合流して、まだ機器の設置を続けている様子を眺めながら水を飲む。
「戒」
肩を守りながら笑顔で歩み寄る翼に軽く手を挙げて応えた。
「どうだった？」
「とりあえずこちらの負傷者はゼロだ」

言った戒に、翼がすいと絆創膏（バンソウコウ）を取り出して示す。
「？」
怪訝な表情を浮かべる戒に翼はちょいちょいと自分の右頬を指さした。
「！」
「負傷者1名だね」
言いながら絆創膏を戒の頬に貼り付けた。

＊確たる夢

その夜――1人ノートパソコンのディスプレイをじっと見つめている真仁（まひと）に戒（カイ）はゆっくり近づく。
「早く寝なよ。明日も忙しいよ」
戒に視線を向けず真仁が応えた。
「……」
寝入っているハンターとクローンたちを見回し、戒はぼそりとつぶやいた。
「物資もばかにならんな」
「まあね。牧場にいた頃のスポンサーが何人か物資を流してくれてるけど、受け取るのにひと苦労だよ」
と、真仁は戒に小瓶を手渡す。
「！」
「君の分。ウォッカだけど」
「有り難い」
戒は笑みを浮かべてその透明の小瓶を受け取った。
「！」
そんな2人の耳にかすかな声。この声は……戒は眉をひそめる。
「まあ聞かなかった事にしてあげてね。張り詰めた空気に癒しが欲しいもんなんだよ。ハンターもクローンも」
それは女の喘ぎ声だった。どこかの部屋か通路かで必死に声を殺しているようだが時折、漏れてくる声は艶のあるなまめかしいものだ。
「節度を持ってくれとは言ってある。ある程度は許してるよ」
しれっとディスプレイから目を外さずに真仁は言い放った。
「お前は？」
「！」
意地悪っぽく戒は問いかける。青年は男を見上げ文句を言うのか

と思いきや、同じようにいたずらな笑みを浮かべた。
「ボクの癒しは君だよ」
「！」
戒は驚いて切れ長の目を丸くする。
「変な意味でじゃないよ」
真仁は一度、目を閉じて暗闇の先を見つめた。
「君はこの世界に溶け込んでいるように見えてその実、ボクにはとても鮮やかに映るんだよ」
現実的であるハズなのに何故か夢見心地にさせられる。
「……？」
戒は意味がよく解らず、いぶかしげに真仁を見下ろした。青年はそんな男を嬉しそうに見上げる。
「まあ気にしないで」
肩をすくめ再びディスプレイに顔を向けた。

朝――いつものようにハンターたちは集まる。
「今日はカメラの設置をよろしく」
真仁は手にある小さな機械を示した。プロジェクターで壁に映し出されているカメラの位置を教鞭（きょうべん）で差しながら、カメラ表示の無い場所を差す。
「この付近にお願いしたい。数は５つほどでいいから」
それから一端、話し合いは終了し戒と翼（つばさ）にカメラが渡された。真仁は付いている部品を指で差して説明する。
「これが太陽パネル、少しの光でも稼働する効率の良いものだから多少、暗い場所でも大丈夫。特殊な電波で街のあちこちにアンテナを張り巡らせてある」
そして裏側を見せて続けた。
「このシートはまずフィルムをはがして置いてね、しばらくすると接着されるから。あと解ってるとは思うけど、出来るだけ見つからない場所にね」

どうせすぐに見つかるけど念頭には入れておいて。真仁はそう付け加え離れていった。外に出る時はかならず2人ひと組で行動するようにハンターたちに徹底させ、カメラ設置に出て行く。
戒たちは以前、クローンの死体を見つけた付近に設置する事になった。

「……」
ピリピリと痺れる肌。戒は肌に伝わる感覚に眉をひそめる。激しい殺気だ。
「翼」
「何？」
カメラを設置し終え、翼に険しい目を向けて発した。
「俺が合図したら何も考えずに走れ」
「え？」
「考えるのは戻ってからだ。いいな」
真剣な面持ちの戒に翼は無言で頷く。数歩、歩いて――「走れ！」
2人は猛然と走る。
「！」
そんな翼の視界に大きな人影が横切った。水貴だ。その表情は少し驚いたように見えたが構わずに走る。
「はぁ……はぁ……水貴がいたから？」
立ち止まった戒に荒い息で問いかけると、戒は周りの気配を探りながら頷いた。翼ほど息は荒れてはいない。
「今はまだ奴とやり合うのは避けたい」

◆第6章〜裏切りの明日

ハンターたちは設置したカメラの位置を真仁(まひと)に示していき、それと映されている映像を照合してコンピュータに入力していく。
地道な作業を繰り返し、真仁たちは少しずつ戦場と庭を広げていった。敵は敵で同じ事をしている。
牽制(けんせい)し合うという意味でも、互いのカメラは壊さずにいるらしい。最も、破壊する行為で相手に情報を知らせる事にもなるため自重しているとも言う。
「水貴(みずき)がいたんだって？」
真仁は入力しながら戒(カイ)に問いかける。
「水貴の持ってる通信コードは探れないの？」
翼(つばさ)が横から訊ねた。
「実は水貴がいた組織は最近ここに来たんだ。前は埼玉辺りで戦っていたんだけどね」
「じゃあなんでこっちに……？」
宙に問いかけながら戒に視線を送った。
「だと思うよ」
応えた真仁も戒に目を向ける。
「俺のせいか……」
２人の視線に戒は小さく溜息を吐き出した。
「ハンターなら誰でも君と闘ってみたいと思うんじゃない？」
「僕は勝てる気がしないから嫌だけど」
翼の言葉に、聞いていたハンターたちも手を挙げて同意した。
「……お前らな」
「ま、どっちかになるだろうね。因みにボクは闘ってみたいと思うよ。ハンターなら、の話だけど」
キーボードを打ちながらしれっと応える。そして戒を一瞥しニコリと笑った。

「水貴たちのいる組織のコードは今日中になんとか設定するよ」
「頼む」
そう言って軽く手を挙げ戒は壁に向かう。しゃがみ込み背を預け水をひと口飲んで落ち着いたように息を吐いた。
「！」
その隣に翼がちょこんと腰掛ける。
「肩は大丈夫か？」
「うん。まだちょっと痛むけど」
と肩をさすり真仁を遠目で見つめた。
「ねえ」
「ん？」
「真仁は僕の事、嫌いなのかな」
「何故だ？」
問いかけた戒に目を向けず顔を伏せる。
「だって……僕にはいつもきついんだ」
「そうか？」
戒はウォッカをひと口、味わいながらさして関心もないように応えた。
「……っ戒には優しいから気づかないんだよ」
「お前の気にしすぎだ」
その言葉に翼は唇を尖らせて納得のいかない表情を浮かべ顔を伏せた。

＊思わぬ客

次の日――戒(カイ)たちは3つのパーティに別れて戦闘を行う事にした。
装備を確認しそれぞれのパーティは地下をあとにする。
「翼(つばさ)」
「ちょ、ちょっと待って！」
もたもたしている翼に戒は溜息を漏らした。
「先に行く」
他の仲間たちはそう言って足早に出て行った。
「すまん」
「ご、ごめん」
ようやく準備を済ませた翼が苦笑いで戒に駆け寄った。
「行くぞ」
仲間たちの後を追うように外に出る。
「！　どうした」
戒は路地裏で立ち止まった翼に振り返り怪訝な表情を浮かべた。
「あのさ……」

「！　……？」
仲間たちのコードとマップを見ていた真仁(まひと)は眉をひそめる。翼と戒のコード表示が消えたのだ。
「どういうコト？　戒、返事して」
音信がない。
「翼？　おーい」
「真仁君、どうした？」
烈(レツ)が青年に近寄る。
「翼クンと戒からの返しが無いんだ」
「！　なんだって？」

それからおよそ３０分後の戸塚の部屋――相変わらずの出っ張った腹を抱え、戸塚は本革のソファにつまらなさそうに足を組んで寝そべっていた。
部下からの報告で翼の姿が見えないと聞きぶーたれて指揮を筒井に任せているのだ。そんな戸塚の部屋にノックの音。
入ってきた筒井が報告をすると戸塚はガバッと起き上がった。
「！　なんだと？」
戸塚は立ち上がり慌てて部屋から出て行く。筒井がその後を追った。足早に１階に降り階段下にある扉を開く。
他の部屋よりも質素な空間だ。開いた扉から見えたのは２つの背中。
「……」
戸塚はその背中を見つめながらゆっくりとその影の前に向かう。そこにいたのは待ちこがれていた人物――翼だ。
「翼……何故、君が」
「……」
翼は戸塚と目を合わせ、すぐに視線を外した。その青年のすぐ後ろにいる男、手錠で拘束されている戒は苦い表情を浮かべ翼を黙って見下ろしていた。
「一体、何があったというのだ？」
抱きしめたい衝動を必死に抑えるように両手を震わせる。翼は問いかけた戸塚に向き直り口を開いた。
「……真仁から逃げてきた」
「！　何故だね？」
翼はその言葉に喉の奥で舌打ちし声を荒げる。
「あいつ、僕をあんたに売ろうとしたんだ」
「！？」
戸塚は自分の名前が出てきた事に驚き、目をギラつかせて憎しみを露わにしている翼を見やった。
「解るように説明してくれんかね」

それに少し落ち着いたような翼がゆっくりと語り始める。

＊叫びと嘲笑

「あいつは、僕が戒(カイ)の傍(そば)にいるのが気にくわないんだ。戒を自分のモノにしようとして僕を売るつもりだった」
「違う！　それはお前の誤か……」
「何が違うって言うのさ！」
翼(つばさ)は振り返り戒の言葉をさえぎる。
「戒は鈍感だから気がついて無いだけだ！　僕には凄くきつくて、戒には優しかった」
「……っ」
手錠の金属音が戸惑いを見せる。
「真仁がこの男を？」
戸塚は手を後ろで組み、「信じられない」というように戒を見つめた。
「あんたは真仁を少年趣味だと思ってたみたいだけど」
「で、こちらに寝返ったという訳かね」
「寝返った訳じゃない」
翼の言葉に戸塚は眉をひそめる。
「ではどういう事かね」
「戒を取られたくないからこっちに来ただけ」
戸塚はまた戒をまじまじと見上げた。こんな男を奪い合っているのか……と目を丸くする。
「僕が嫌いなのは真仁だけ。だから仲間の情報は売らないよ」
「随分と勝手な言い分だな」
口の端を吊り上げて言い放つ。喉を詰まらせた翼に戸塚は付け加えた。
「条件がある」
「！　戒はだめだよ」
戸塚は「そんなものはいらん」とでも言うように左手を振り、翼

に目を合わせて交渉を始めた。
「その男は君のモノだ。しかし、君がわたしのモノになるならここに置いてやってもいい」
「！」
翼は一瞬、驚き戸塚の言葉を理解した。じっと戸塚を見つめ小さく発する。
「……酷いコトしない？」
「もちろんだとも！　優しくしてやろう」
戸塚は両手を広げ安心させるように笑顔を見せた。
「翼！　馬鹿なことは……っ」
「うるさいな！　戒は黙っててよ！」
多少、疑ってはいる戸塚だがこの様子は演技とも思えない。ひとまず筒井に視線を流し軽く手を示した。
「部屋をあてがってやれ。後でまたゆっくり聞こう。奥の部屋だ」
筒井はそれに無言で頷き翼を促す。翼は戒の腕を掴み男のあとについて部屋を出て行った。
「……」
それを確認した戸塚は数秒ほど険しい表情を浮かべていたが自然と笑みがこぼれる。
「こいつはいい」
戒という強力な戦力が失われた真仁は慌てている事だろう。しかも翼まで手に入るとはわたしに運が向いてきた。これが喜ばずにいられようか。
「く、くくく……はぁっはっはっはっ！」

「……っ」
足の重い戒を無理矢理に引っ張り翼は筒井の後ろを追いかける。案内された部屋に入ると、想像よりも豪華な部屋だった。
「わお」
口笛を鳴らし部屋を見回しながら戒を引きずるように扉をくぐる。

「！」
目の前の椅子を見つけ、戒をそこまで引っ張り手錠を片方だけ外した。
「翼……っ」
「黙ってて」
困惑している戒にぴしゃりと言い捨て強引に座らせる。そして腕を椅子の背もたれに回して再び手錠をかけた。
「これでやっと真仁から離れられた」
翼はニコリと可愛い笑顔を戒に降ろす。
「あとで呼ぶ」
筒井はそれを眺めてひと言だけ発すると扉を閉めた。

◆第7章〜終焉の序章

筒井は足早にモニタールームに向かう。
「どうだ？」
言ってのぞき込んだディスプレイには翼(つばさ)の後ろ姿とその前で椅子に拘束されている戒(カイ)が映っていた。
＜翼！　考え直せ＞
＜もう遅いよ＞
ディスプレイに内臓されているスピーカーから2人の会話が流れる。筒井はその光景に目を細めて苦い表情を浮かべた。
遅れて戸塚が部屋に入ってくる。
「どうだ」
「言い争っています」

「……っ翼」
フン！　とそっぽを向いている翼に何か言い出そうとした戒だが、その言葉を飲み込み別の言葉を発した。
「弟じゃなかったのか……」
翼は振り返り腕を組みながら不敵な微笑みを見せる。
「全然、疑わないんだね。僕は戒の傍(そば)にいたかったんだ」
例え弟としてでも構わない。戒の傍にいられれば……離れるのだけは嫌だった。
「なのに、あいつは戒を呼び戻して僕から奪おうとした」
折角、僕のモノになったのに！　翼は怒りを露(あら)わにして拳を握りしめる。しかしすぐその表情をゆるませて戒の前にへたり込んだ。
その太ももに頭を乗せ、恍惚とした顔になる。
「戒がいなくなれば真仁(まひと)はおしまい。こっちには水貴(みずき)がいるからね」
「！？」
その言葉にビクリと体を強ばらせた。それを確認するかのように

顔を上げまた可愛く笑う。
「でも、これで水貴とも闘わなくて済むね」
「翼っ……お前は自分が何をしているのか――」
「解ってるよ。充分にね」
「こんな事をしている状況では……っ」
翼は立ち上がり言葉を止めるためにその唇を自身の唇で塞いだ。
驚く戒から離れ小さくつぶやく。
「何を言っても、もう遅いんだよ。戒」

「……」
その様子をディスプレイ越しに眺めていた戸塚。やはり演技ではなく本当なのか？　計りかねた。

＊馬にニンジン

「！」
翼（つばさ）の耳にノックの音。開いた扉から姿を現したのは筒井だ。
「何か用？」
「戸塚が呼んでいる」
ぶっきらぼうに発し、来るように頭を動かした。翼は「仕方がないな」と小さく溜息を吐き出し立ち上がる。
「逃げようなんて思わないでね。どう考えてもこっから逃げるなんて無理なの、解るよね」
「！　翼っ」
戒（カイ）の呼び止める声を無視して筒井の後ろに続く。
「……」
無言で前を歩く筒井に翼は少し背中に睨みを利かせた。
「戒に触ったらだめだよ」
「解っている」
この建物に入る前にすでにボディチェックは済ませてある。２人は何も持っていなかった。
一際（ひときわ）、豪華な扉の前まで来ると筒井がノックした。
「入れ」
という声が扉の向こうから聞こえて筒井は翼を促す。開かれた扉の向こうにいたのは当然、戸塚。
「何の用？」
「今何時だと思っているのかね。食事にしよう」
「！」
嬉しそうな顔の後ろに並んでいる料理に翼は目を輝かせた。ソファの前のリビングテーブルに乗せられている色とりどりの料理を見下ろす。

「……凄い」
「好きなだけ食べていいんだよ」
戸塚は子どもに言うような口調でソファに腰掛け、翼にも座るように手を示す。翼は少しためらったが目の前の料理に飛びつくように戸塚の隣に腰を落とした。
サンドウィッチを手に取りほおばる翼の腰に手を回す。
「……」
ちらりと戸塚を見やった翼だが、気づかないフリをして食べ物にパクついた。
「戒にも持ってっていい？」
「いいとも」
腰に手を回し太ももをゆっくりとなで回す。翼は眉をひそめるが目の前の食べ物の魅力には適わない。
「そんなに質素な生活をしていたのかね」
「ブロックフードばっかり」
戸塚は鼻で笑った。そして、ソファの下に隠してあったボトルを取り出し翼の気を引くように揺らす。
「！　それ……」
「シャンパンだ」
手を止めてボトルを見つめた。深い緑のボトルは翼を誘うように中の液体を波立たせる。戸塚はそれを確認し栓を抜く。小気味の良い音がして心地よい香りが部屋を満たした。
手渡したシャンパングラスに注ぎ乾杯の合図を示す。青年はそれに軽く応えてシャンパンを一気に流し込んだ。
「！」
その味にペロリと唇を舐める。そのしぐさが可愛かったのか戸塚の口元はだらしなく緩んだ。
「戒の武器やヘッドセットはどうしたんだね」
おもむろに戸塚が問いかける。ピザを手に取っていた翼はちらりと一瞥し口を開いた。

「壊した。真仁（まひと）にバレないようにここまで来るの苦労したんだから」
「そうか」
戸塚は微笑みながら心の中で舌打ちする。持って来てくれていれば調べられたものを……と少し苛ついた。
真仁たちが使うヘッドセットは真仁がプログラムしたものだ。一体、どんなプログラムを組んでいるのか他の組織は解析したくてたまらないのである。
翼はそういうものには疎（うと）そうだ。そこがまた可愛くもあるのだが……と戸塚は勝手に想像しニヤリと笑う。
真仁も年の割には童顔でしぐさは可愛いとは思うのだが、組織間の付き合いをしている時の事は苛つく記憶しか思い出せない。
頭が良すぎて癇（かん）に障（さわ）る。そう思うと多少バカな翼が余計に可愛く思えた。
「……」
変な想像をされている気がして翼は少しムッとなる。

*ディスプレイの向こう

食事が終り、翼(つばさ)は戒(カイ)の分の料理を手に部屋に戻っていった。筒井はそれを確認すると2階にあるモニタールームに入り様子を窺(うかが)う。
＜戒の分だよ＞
＜……＞
＜いつまで反抗するのかな、食べなきゃ口移しで食べさせちゃうぞ＞
「……」
恋人同士のいちゃつきに聞こえて筒井は頭を抱えた。
＜翼……何故だ＞
＜何度も言ったハズだけど＞
青年の声が低くなる。
＜よく考えろ。今はこんな事をしている時では……＞
＜どうでもいい＞
＜何！？＞
＜戒さえいれば周りなんてどうでもいいんだよ＞
翼の語気が強くなった。
＜戒がいれば何もいらない＞
「……」
か細く発した翼に筒井は目を細める。ディスプレイには、やはり戒の前でしゃがみ込みその太ももに頭を乗せる翼の姿が映っていた。

それから夕食にも呼ばれ、相変わらずの戸塚の手に顔をしかめる。
「歯ブラシ2本、ちょうだい」
「ああ、後で持っていかせよう」
部屋から出る時に戸塚に発し翼は部屋に戻っていく。その手には戒の分の料理。
＜はい、アーン＞
「……」

筒井はディスプレイに映る映像にバカらしくなってきた。なんでこんなものを見ていなくちゃならないんだ。
足を組み片肘を突いて横目に眺める。疑う余地などまるでない。
「！」
そういえば……寝る時はどうするんだ？　筒井はふと疑問が過ぎった。食べ終わると翼は戒の手錠を片方だけ外し2本の歯ブラシを持って洗面所に向かう。
しばらく水音が響き、2人は戻ってきた。戒の手錠は前でつながれている。
「……？」
筒井は気になって少し身を乗り出した。すると翼は乱暴に戒を突き飛ばすようにベッドに転がし、自身もベッドに体を預ける。
「は……なるほどね」
男は苦笑いを浮かべ呆れたように顔を覆った。

「戒に腕枕してもらうの初めてかも」
「……」
にこやかな翼に戒は眉をひそめる。青年は前につながれた男の腕の間に潜り込み、その胸に顔を埋(うず)めていた。
「何を言っても無駄だからね」
戒の目を見て言い放つ。決意の眼差しに戒は言葉を詰まらせた。
「翼……」
「戒がいれば何もいらない。世界がどうなったって構わない」
青年はそう言って静かに目を閉じた。

◆第8章〜幕は下ろされた

次の朝――戸塚は翼(つばさ)を呼び出し朝食を食べる。今日は先日よりもさらに手がエスカレートした。

「……」

顔をしかめた翼だが約束した以上は仕方がない。我慢して料理に手を伸ばした。その味に笑みを浮かべると戸塚も嬉しそうに笑う。

気持ち悪いとしか言いようがないが、扉のそばでガードついでに見ている筒井は目を逸らした。

食事を終えた翼は昨日と同じように料理を手に部屋に戻る。それを確認した戸塚はモニタールームに向かった。筒井に何かを目配せしてモニタールームに入る。

「！」

しばらくして翼のいる部屋にノックの音が響き入ってきたのは筒井ともう1人、見知らぬ男。

「戒(カイ)を借りるぞ」

「！　なんでっ！？」

オロオロする翼に筒井はぶっきらぼうに発した。

「終ったら返してやる」

「痛い事しないでよ！」

「解っている」

戸塚はモニタールームで今日の戦闘風景を見つめていた。真仁(まひと)側は平静を装うように銃撃戦を繰り広げているが、その戸惑いは微かに見て取れる。

男はニヤリと口角を上げ通信機を手に取った。

＜この声が聞こえているか＞

「！」
真仁は聞こえてくる音声にピクリと反応する。簡単な無線機でも受信出来る波長で流されている声。それが戸塚だと理解するのに時間はかからなかった。
＜戒は預かっている。返してほしければ1人で来い＞
「！　戒が！？」
烈（レッ）は驚いて真仁を見やる。
「……」
苦い表情を浮かべて青年は思案するように押し黙った。そしておもむろに立ち上がる。
「！？　真仁君、まさかきみっ」
目を丸くして見つめる老齢の男に真仁は困ったように微笑んだ。
「ごめんね……途中で投げ出すようなコトになって」
「！　まっ、待ちなさい！」
出口に向かう真仁の背中に手を伸ばす。

＊エサの効果

「来ますかね」
「来るさ。必ずな」
筒井と戸塚はディスプレイを見つめる。そこには後ろ手に手錠をかけられた戒（カイ）の姿。男2人に両側から腕を掴まれ広い道路で誰かが来るのを待っていた。

「！」
戒は見覚えのある影が近づいてくるのを見つめ、確認出来る距離まで来ると目を丸くして声を上げる。
「真仁（まひと）！？」
「やあ」
真仁はいつものように軽く挨拶した。

戸塚はディスプレイに映る真仁に勝ち誇った表情を浮かべる。
「！」
扉が開く音に筒井が振り返るとそこに翼（つばさ）が立っていた。
「ここには入るな」
「まあ良いじゃないか、真仁が傷つく処を見せてやろう」
「！　真仁？」
翼は足早に戸塚に近づく。そして画面を確認して小さく笑ったが反対の位置にいる戒に眉間にしわを寄せた。
「なんで戒が？」
戸塚は翼に微笑んで褒めてくれとでも言うように発する。
「真仁は奴が好きなんだろう？　まんまとおびき寄せられたよ」
「絶対、取られないようにしてよ」
「解っている」

「どうして……っ」
戒は男たちの腕から逃れようと体を揺する。
「解ってるだろ」
青年は静かにそう言い、戒を見つめた。
「翼か……彼には隠せなかったんだね」
１０ｍほどの距離。真仁は溜息混じりにつぶやく。

「殺すの？」
ディスプレイを見つめながら翼が戸塚に問いかけた。
「いいや、捕まえて色々と訊きたい事がある」
「じゃあ……」
翼はゆっくりとその後を戸塚の耳元で伝えた。
「あんたが死ぬ方がいいね」
「！？」
振り向いた瞬間――可愛い笑顔の端に捉えられた銀色に輝く薄い金属が戸塚の首を走る。
「なぁ！？」
熱い痛みに首を押さえその瞳は驚愕に見開かれた。
「！？　貴様っ！」
すかさず筒井は翼に飛びかかる。
「Ｂｙｅ（バイ）」
翼は軽く言ってステンドガラスに突進すると、割れて散らばる色鮮やかなガラスたちが太陽の光を反射して輝いた。
「殺せ！」
翼は筒井の声を聞きながら無事に地面に着地し、状況が飲み込めないハンターたちの横をかすめて走り去った。
「戸塚！」
筒井は慌てて戸塚に駆け寄るが「助からない」とすぐに悟る。翼はいつの間に刃物を手に入れていたんだ？　記憶をたぐり寄せる……
「！　トレイ！？」

落ちている銀色の板を見やった。
戒に食べさせるための料理を乗せていた金属のトレイ。それを力任せに引き裂き簡易の刃物としたのか！？
翼の考えとは思えない。戒の入れ知恵か！

「……」
互いに見合う戒と真仁。数十秒の沈黙のあと……青年がぼそりとつぶやく。
「そろそろかな」
「そうだな」
「？」
示し合わせたような2人のセリフに男2人は怪訝な表情を浮かべた。その刹那――後ろ手にかけていたハズの手錠がガシャリと地面に落ちて戒はニヤリと笑みを浮かべる。
「！？　きさ……っ」
言い終わらないうちに戒は2人を叩き伏せた。
「ピッキングも得意なんだねぇ」
「いいから戻れ」
途端に始まる銃撃戦。戒は身を低くして近くの壁に走る。土嚢（どのう）を盾に銃を構えている仲間が戒に武器とヘッドセットを投げ渡した。
右耳に装着すると聞き慣れた声が流れる。
＜おかえり＞

＊口火

「翼(つばさ)は？」

＜こっちに向かってる姿を捉えたよ＞

戒は投げ渡された武器を装備しながら辺りを確認した。戦況としては思わしくない。そんな戒(カイ)のヘッドセットに低い声が響く。

＜戒、聞こえているか＞

「！？」

戒はその声に目を見開きヘッドセットに指をあてて聞き入った。

「……水貴(みずき)か？」

＜翼のヘッドセットから発信されている＞

真仁の声が流れ、そのすぐあとに水貴が低く発した。

＜今から言う場所に来い＞

「水貴……」

戒は立ち上がり遠くを見つめる。

＜行くのかい？＞

「どうやら決着をつけたいらしい」

＜無茶だけはしないようにね＞

真仁の心配するような声色に戒は小さく笑って駆け出した。

「おい！　いい加減にしろよな！」

鉄骨に手錠でつながれている翼が目の前の大きな男に声を張り上げる。荒廃した建物と崩れた壁に囲まれた敷地。遠くの方で銃声が微かに聞こえていた。

「黙ってろ」

「何バカなこと考えてんだよ！　今はそんな状況じゃ……っ」

「黙らないと突っ込むぞ」

「……っ」

翼は少し青ざめて押し黙った。

「ヘンタイ！」
瞳を潤ませて叫ぶ翼に水貴は目を据わらせ呆れたように低く言い放つ。
「本当に突っ込まれたいか、ガキ」
「そんな趣味なのか？」
意外だな。という声に口角を上げて振り向いた。
「逃げずによくも来た」
水貴はショットガンを手に戒を見やる。
「……」
互いに見合い、何かの合図を待つように沈黙が続いた。
「……！」
ふいに軽い音が2人の耳に届くと戒と水貴は同時に武器を手に駆け出す。空に響く銃声は2人の力が互角だと示していた。
「チッ……」
戒は壁に身を隠し手のリボルバーを見つめる。こいつでは水貴の体に深い傷は刻めない。鍛え上げられた体に突き刺さる威力は……考えながら腰の背後にあるオートマチック拳銃に手が伸びる。
大きめのグリップはその威力の高さを示している。しかし……戒は眉間のしわを深くした。
威力が大きいという事はその反動も大きい。相手にしっかりと当てるためには、やはり今までよりも構えて引鉄（ひきがね）を引かねばならない。
ヘタなハンター相手なら問題は無いが相手は水貴だ、その一瞬の間（ま）を見逃すとは思えない。
「……威力はあっても使えんか」
水貴なら問題なく扱えるんだろうな。と考えながらデザートイーグルを仕舞った。そもそも相手は今ショットガンを持っている。こちらとしては反則に近い武器だ。
「どうした。ずっと隠れているつもりか？」
水貴は己の体に自信がある。戒とは違って何も盾にする事なく、彼が隠れている壁に少しずつ足を進めた。

ショットガンの銃身の下部にある部品をスライドさせ不敵な笑みを浮かべる。
「戒っ！」
翼はその光景を見つめるしかなかった。あの体格差は詐欺だ……と冷や汗を流す。戒は鍛えていると言っても筋肉を増やすためのトレーニングじゃない。
柔軟に素早く動けるようにするためのものだ。それが繊細な武器の操作を可能にしている。
「……」
近づいてくる足音を聞きながら戒は思案した。まともにぶつかっても勝てる相手じゃない。
意を決して壁から離れ駆け出す。
「！」
飛び出してきた戒を見やりその手にあるハンドガンに口の端を吊り上げた。
「そんなものが当たるとでも思っているのか！」
「！　チッ……」
やはり避けられてしまう。放たれる散弾を転がって避けるが、徐々に間合いが詰まっていくのをどうする事も出来ない。
デザートイーグルを捨てリボルバーに持ち替えた。相手も散弾を使い切ったのか乱暴にショットガンを捨てるとハンドガンを手にする。
こちらは銃弾がかすっただけでも危険だというのに、相手の水貴は切れるようにかすめる銃弾を意に介す事もなく歩いてくる。
「化け物め……っ」
リボルバーにカートリッジを再装填（さいそうてん）している暇は無い。使い切ったリボルバーを捨て別のリボルバーを取り出す。

◆最終章～螺旋は踊る

一端、間合いを離そうとした戒（カイ）に水貴（みずき）は素早く迫ってきた。
「な！？」
「ざんねん」
驚く戒にニヤけた顔を近づけ腰に両腕を回し持ち上げる。
「！？　うあっ！」
「戒！」
ギリギリと締め上げる苦しみに歯を食いしばった。
「がっ……あ……」
骨のきしむミシミシという音が全身に伝わる。
「もっと楽しめると思ったが拍子抜けだ。背骨をへし折ってやる」
「やめろぉー！」
必死に手を伸ばして翼は叫んだ。
「ぐ……っ」
戒は震える手でショルダーホルスターの右側からナイフを抜き、未だ締め上げてくる水貴の右腕に突き刺した。
「！　そんなもので俺がひるむとでも思っているのか？」
水貴は鼻で笑いさらに力を込める。
「……っ」
苦しみながら突き刺したナイフの柄にある仕掛けに触れた――
「！」
すると柄からもう1枚の刃が飛び出し水貴は目を丸くする。
「――っ」
それは糸切りばさみのような形状になり戒は一気に強く握りしめた。
「ぐぉっ！？」
バツン！　という音がして肉が切り裂かれる。さすがの水貴もその痛みに戒を投げ飛ばすように離した。

「げほっごほっ……っ」
痛みに顔をしかめて水貴の腕から吹き出す血を見やる。
「何あの武器……」
見た事の無いナイフに翼はその光景を呆然と見つめた。
「き、きさま！」
血が止まらない。水貴は傷口を押さえながら、まだ痛みで地面に転がっている戒を睨み付けた。刃は動脈まで達したのだろう。流れる血の量と鮮やかな色からそれが見て取れた。
それでも水貴は戒を殺そうと少しずつ歩み寄る。戒は立ち上がれないながらも腰の背後からスローイングナイフ（投げ用ナイフ）を抜き水貴に放った。
「！？　ぐあっ！」
男の右目にそれは深々と突き刺さったがその足は止まらない。これほどの執念と体力に戒は一瞬、体を強ばらせた。
「……。！」
戒の右手に硬い感触。先ほど投げ捨てたデザートイーグルだ。それを拾い上げ水貴に銃口を向けて引鉄（ひきがね）を引いた。
「！？　か……っ」
強烈な弾丸は水貴の眉間にめり込み、男はゆっくりと後ろに倒れていく……動いてこないかと数秒じっと見つめていたが死んだと確信し戒は立ち上がった。
「……まったく」
溜息を吐き出し翼に足を向ける。

＊ニュートラル

「戸塚は倒したけどまだ終った訳じゃない」
帰ってきたハンターたちに真仁(まひと)はそう告げ、これからも協力してくれるように願った。もちろん、ハンターたちはそれを了承する。

その夜――いつものように1人パソコンをいじっている真仁に、戒(カイ)はウォッカの小瓶を手に歩み寄った。
「！」
そんな戒に真仁はヘッドセットを差し出す。
「チェックよろしく」
言われてヘッドセットを受け取った。右耳に装着し起動させる。
「！？」
そこに映し出された文字は戒を驚かせた。そんな男を真仁はいつもの微笑みで見つめる。そしてつぶやくように発した。
「ボクの事が知りたいんだろ？」
君のおかげで予想よりも早く収束しそうだからご褒美として教えてあげる……真仁はそう続け足を組んでデスクに片肘を突いた。
「……っお前は……何者だ」
驚愕(きょうがく)に目を見開きヘッドセットを外す。
そこに映し出されていたものは……真仁に示されたコードだった。だがクローンではない。そのコードはクローンのものではなかった。じゃあ一体、何のコードなんだ？
「それはボクだけに埋め込まれているただ1つのコードだよ」
戒を一瞥し応える。少しためらうように言葉を切ったあと、青年は暗闇に視線を向けた。
「ボクは言わば人間とクローンの中間に位置する」
「！　どういう事だ」
真仁は一度、目を閉じ語り始めた。

「クローンが成功するとね、科学者というものはそこから造り出そうとするんだよ」
『天才』という人間を――
「ボクの祖父という位置づけにいた科学者は優秀な人間から摂取した細胞をさらに遺伝子操作しクローンを造った」
話がまだ見えてこない戒をちらりと見て再び闇に目を移す。
「その中から優秀なクローンだけを見繕(みつくろ)い大幅な成長促進をして男女の“つがい”にした。解るかな？　子どもを生ませたんだよ」
「！？　まさか……」
「飲み込みが早くて助かる。それがボク」
完璧な人間を造りたかったんだろうね。真仁は淡々と続ける。
「でも、そのクローンたちは無理な遺伝子操作と成長促進のためにボクが１０歳になる前に死んでしまったよ」
その科学者はクローンたちを自分の息子や養女とし、真仁を孫として戸籍を作っていた。
「祖父である科学者は5年以上前に病気で死んじゃったけどね」
科学者のスポンサーだったうちの1人がそのまま真仁を引き取り、彼は自由気ままに生活する事が出来た。
「何故ボクを引き取ったか解ってる。祖父の研究が成功したかを確かめるためだ」
そのために意図的に真仁を自由にさせていた事も彼は知っていた。
「大富豪っていうのは政財界ともつながっている。だからボク自身にもある程度の力が使えたってワケ」
薄笑いで肩をすくめた。
「今考えると一度くらいグレてても良かったかなって思うよ。この年ではさすがにもう恥ずかしくてイヤだけど」
笑ったあと少し表情を険しくさせた。
「そんな時にある企業の話が伝わってきたんだ」
調べるためには組織を作らなくてはならない。
「大変だったよ。組織をここまでにするのはね」

＊素晴らしきもの

それから一度、深呼吸をして水の入ったグラスに手を伸ばす。ひと口含んで続けた。
「お金もあるし力も持ってるボクにその企業は喜んで手を出してきた」
戸籍を調べてもどこにも不備はない。
「ボクのコードは特別なチップだから特別なプログラムじゃないと表示されない」
デスクに置かれたヘッドセットを手にして発する。
「……」
戒（カイ）は真仁（まひと）をじっと見下ろす。今までの違和感と不自然さが、あたかもジグソーパズルが完成するようにつながった。
「ボクの本当の名前はね、真の人と書いて真人（まひと）」
でもボクは完璧じゃない。
「そもそも完璧って何さ。そんなのあるはずがない」
無い物ねだりだよね。真仁は戒を見上げて笑う。
「完璧なものに何の魅力があるんだろう」
世の中は完璧じゃないからこそ素晴らしいんじゃないか。そんな真仁の言葉は初めて感情を表しているように戒には思えた。
「このまま言わなくても君は訊かなかっただろうけどね」
「！」
「1人くらい知ってて欲しいじゃない。ボクのこと」
少し困ったような笑みを浮かべた。
「満足したかい？」
いつもの笑顔に戻った真仁に戒は口の端を吊り上げ後ろに視線を投げて応える。
「だ、そうだ。翼（つばさ）」
「！？」

翼はビクッと体を強ばらせバツの悪そうに頭をかいた。
「2人のおかげで戸塚も倒せたし。ご苦労さんだったね」
「ホントだよ……あんなのはもうこりごり」
肩をすくめて戒と真仁に近づく。
「なかなかの演技だったな」
戒が皮肉混じりに発すると翼は「うげぇ～」と舌を出した。
「男とのキスや添い寝なんて金輪際（こんりんざい）、嫌だからな」
「！　戒と？」
真仁は羨ましげに翼と戒を交互に見やる。
「何がいいのかわかんないよ……」
「戒だからいいんじゃないか」
「それがよく分かんない……」
げんなりして言い放った翼に真仁は小さく笑う。そして話を戻した。
「戸塚が死んだあと筒井があとを引き継いだけど長くは続かないだろうね」
「なんで？」
翼は首をかしげた。戸塚という男と数日、接したが何故あの男がリーダーとして務まっていたのか不思議で仕方がない。
「戸塚は確かに人として最低だったけど、人を集める能力にかけては優秀だったんだ」
筒井は人を動かす能力に長けてはいるけど集める能力には欠けている。真仁は無表情に言い放ち口の端を吊り上げた。
「スペアのなくなった敵が定数のまま戦うボクに勝てると思う？」
「……」
戒と翼は互いに顔を見合わせ真仁に肩をすくめる。
「解ればよろしい」
青年は得意げに薄笑いを浮かべてヘッドセットを分解した。

＊続く果て

そうして数ヶ月後――事態は収束に向かう。
真仁(まひと)はその後、組織を解散させ消息不明となったが2人はどこにいるのかなんとなく解っていた。
何故なら、政府が『部分的クローン研究を積極的に行う』と表明し現存するクローンの保護と今後のクローン作成に対する定義を模索する方針を打ち出したのだ。
戒(カイ)と翼(つばさ)はしばらく日本にいたが再びモンゴルに飛び平和な生活を取り戻した。刺激のある生き方も悪くはないが、果てまで続く大草原を眺めて暮らすのも良い。

「戒〜」
「なんだ」
翼が包みを持ってソファに腰掛けている戒に近づく。
「真仁から……」
「！　ほう」
受け取って包みを開けると中には小瓶が入っていた。
「？　錠剤？」
カラカラと5錠ほど入った小瓶を振って同封されている手紙を読む。
「……若返りの薬？」
戒は眉間にしわを寄せた。
『これで2年ほど介護を遅らせる事が出来るよ。真仁』
「プッ……あはははっ」
手紙を読んだ翼が吹き出す。
「あのやろう……俺で実験するつもりか」
目を据わらせ薄笑いを浮かべてつぶやいた。

END

＊続く果て（後書き）

＊長らくのお付き合いありがとうございます。
＜ケルベロスの牙＞とは戒、翼、真仁の３人の事ですです。
作中で説明しようかとも思ったのですけど、そうするとなんだか違う気がしてしまってですね……
解っていただけた方がいたかなとか、解らなくてもいいかな～とか思ったり。強調するような事柄でもないからタイトルだけでいいか～と。
読んでくださった皆様が少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

２０１１．３．６　河野　る宇

※作中に登場する戸塚、筒井の２人は瀬田　一郎さまのキャラクターです。
これらのキャラクターは瀬田　一郎さまの著作権下にあります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7257q/

踊れ その果てで?＜ケルベロスの牙＞

2011年8月30日03時24分発行